

# SHOW HHEYシネマルーム

★★★★

## ベロニカとの記憶

2015年/イギリス映画  
配給：ロングライド/108分

2017 (平成29) 年2月13日鑑賞

シネ・リーブル梅田

### Data

監督：リテーシュ・バトラ  
原作：ジュリアン・バーンズ『終わりの感覚』（新潮社刊）  
脚本：ニック・ペイン  
出演：ジム・ブロードベント/シャ  
ーロット・ランプリング/ハ  
リエット・ウォルター/ミシ  
エル・ドッカーリー/エミリ  
ー・モーティマー/ビリー・  
ハウル/ジョー・アルウィン  
/フレイア・メーバー/マシ  
ュー・ゲード

## 👁️👁️ みどころ

男でも女でも、高校・大学時代は青春真っ盛り。『花筐/HANAGATA MI』（17年）や『わが青春に悔なし』（46年）に見た、戦争直前の日本の若者の青春は痛ましい限りだが、バーンズの原作『終わりの感覚』にみるそれは・・・？

60歳を過ぎ、今はロンドンで引退生活を送るトニーは、1960年代に高校大学の青春時代を過ごした私と同じように（？）40年前にはベロニカとの波乱に満ちた恋と別れがあったらしい。しかして、ある日ベロニカの母親の死亡に伴い、弁護士から遺品を渡すとの手紙が届いたが、一体なぜ俺に？

男がミステリアスな女性に振り回されるのは仕方ないが、それにしてもあれから40年後の今もこんな行動に？なるほど、なるほど、こりゃ何としても解明しなければ・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ムンバイ出身の監督第2作に注目！原作は？■□■

1979年にインドのムンバイで生まれ、アメリカの大学に入り、卒業後映画の仕事を始めたリテーシュ・バトラ監督の長編デビュー作が『めぐり逢わせのお弁当』（13年）で、これは素晴らしかった（『シネマルーム33』45頁参照）。本作はそんな彼の第2作だが、その舞台はインドではないうえ、原作が英国を代表する作家の一人であるジュリアン・バーンズが2011年に発表した小説『終わりの感覚（The Sense of an Ending）』とのこと。同作は英国で最も権威のあるブッカー賞に輝き、バーンズの最高傑作とされているそうだが、さてその内容は？

本作の邦題は『ベロニカとの記憶』だが、原題は『The Sense of an Ending』で、原作と同じ。しかし、原題や原作のタイトルである『終わりの感覚』では、一体何のことかはさっぱりわからない。他方、本作のチラシには、『さざなみ』（15年）（『シネマルーム38』201頁参照）でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされた1946年生まれの名女優シャーロット・ランプリングと、本作で名演技を見せる老俳優ジム・ブロードベントの顔が写っているから、この写真と邦題を考え合わせれば、それなりに本作の内容をイメージすることができる。さらに、チラシには「奇妙な遺品が呼び覚ます、40年前の青春の秘密——。人生の謎を自ら解き明かす感動のミステリー。」と書かれているから、なるほど、なるほど……。

## ■本作のイントロダクションは？■

ちなみに、公式ホームページによると本作の「イントロダクション」は以下の通りだ。

### 『めぐり逢わせのお弁当』監督と 豪華英国俳優が贈る、記憶をめぐる感動のミステリー

ヨーロッパでインド映画の歴史を書き換える大ヒットを記録し、そして日本でもロングラン大ヒットとなった『めぐり逢わせのお弁当』。リタージュ・パトラ監督の待望の第二作目は、イギリスでもっとも権威ある文学賞、ブッカー賞に輝いたジュリアン・バーンズの小説「終わりの感覚」（新潮社）を映画化。監督自身も大ファンだったという小説のエッセンスとトーンを損なうことなく、非凡な演出手腕を発揮し、ロンドンを舞台に人生の謎を自ら解き明かす感動のミステリーを完成させた。

忘れていた過去の記憶を辿ることになる主人公トニーには、『アイリス』でアカデミー賞を受賞した名優ジム・ブロードベント。トニーの初恋の人ベロニカには、半世紀以上にわたって映画界で活躍するシャーロット・ランプリング。さらに『つぐない』のハリエット・ウォルター、「ダウントン・アビー」のミシェル・ドッカーリーら、イギリスを代表する豪華な顔ぶれが揃った。

## ■ちょうど私の年齢と感覚にぴったり！しかし観客は？■

本作の主人公トニー・ウェブスター（ジム・ブロードベント）は今、ロンドンで一人穏やかに年金暮らしをしているらしい。今にもシングルマザーになろうとしている一人娘のスージー（ミシェル・ドッカーリー）の出産準備に、別れた元妻のマーガレット（ハリエット・ウォルター）と共に振り回されているようだが、食事でも一人でちゃんとしているし、規則正しい生活を営んでいるようだから、一人暮らしのじいさんとしてはほぼ完璧。もっとも、本作冒頭には彼が経営している小さなライカのカメラ店の様子が映し出されるが、

こんな趣味的な経営では、1台もカメラは売れないのでは・・・？

バトラ監督は『めぐり逢わせのお弁当』でもスピーディーなカメラ展開が目立っていたが、本作でも冒頭に映る高校・大学時代のトニー（ピリー・ハウル）の姿をはじめとして、あの時代とこの時代、あの現実とこの回想が交錯しあうスピーディーなカメラ展開が際立っている。男には誰にでも（男に限らず？）初恋の思い出があるもの。本作は若き日のトニーの若き日のベロニカ（フレリア・メーバー）に対する「それ」をテーマとした映画らしいが、そんな話なら負けず劣らず俺だって……。ベロニカの家にはじめて招かれたトニーは、ベロニカの兄のジャック（エドワード・ホルクロフト）や母親のセーラ・フォード（エミリー・モーティマー）等から歓待されたが、さてトニーとベロニカとの初恋の展開は・・・？

それにしても、おおむね60歳過ぎのトニーが、今なぜ40年前の初恋を？そして、40年前の青春の秘密に至る「奇妙な遺品」とは、一体ナニ？

## ■□■何故こんな遺品が俺に？その遺言の執行は？■□■

本作は、ある日法律事務所からトニー宛てに1通の手紙が届くところからスタートする。その手紙は、40年前の初恋の女性ベロニカの自宅に招かれた時に一度だけ会ったことのある、ベロニカの母親セーラの遺言執行に関するもの。そこには、セーラからの手紙とトニーへの「添付品」があると書いてあったから、トニーはそれを受領するための書類を送ったが、弁護士からは「添付品をエイドリアンの親友であるあなたに遺します」というセーラの手紙と現金500ポンドのみが届き、肝心の添付品が届かなかった。不審に思ったトニーが弁護士のもとを訪れると、添付品はトニーの友人で、その後トニーに代わってベロニカと結婚したはずのエイドリアンの日記らしいが、セーラの遺言執行人であるベロニカがその引き渡しを拒んでいるらしい。しかし、それって違法では・・・？

40年前の恋人だったベロニカとはたしかに別れたし、その後ベロニカはエイドリアンにのりかえて（？）結婚し、子供までできたそうだが、ベロニカの母親セーラはなぜ遺言でエイドリアンの日記をトニーに引き渡すと書いていたの？そしてまた、ベロニカはその遺言執行人なのに、なぜその執行を不当に拒否しているの・・・？

## ■□■英国の若者たちの高校・大学時代（＝青春）は？■□■

本作は、近時の邦画のように丁寧に説明してくれないが、スピーディーに展開していくストーリーの中から、少しずつ本作の「論点」が浮かび上がってくる。高校時代のトニーと高校時代のエイドリアン（ジョー・アルウィン）との友情や、それに絡む共通の友人であるコリン（ピーター・ワイト）やアレックス（ヒルトン・マクレー）との青春時代の会話は知的でユーモアに富んでいる。

これは大林彦彦監督の遺作になるかもしれない『花筐／HANAGATAMI』（17年）

で見た、太平洋戦争直前の、戦地に赴き死ぬことを当然のこのように教えられた日本の若者たちとは全く異質のもので、自分たちの青春を楽しくかつ前向きに考えるもの。そして、考えてみれば、それは1960年代に中学、高校そして大学時代を過ごした私も同じようなものだ。青春時代の男たちの会話の中に、学問や将来の仕事の他、女性との恋愛や結婚に関する話題が入ってくるのは当然。教師とも対等に渡り合う独自の歴史観を持つと共に、ディラン・トーマスの詩を愛していたエイドリアンは一見恋愛には無縁で、トニーのベロニカに対する恋愛話の一方的な聞き役だったはずだが、トニーとベロニカとの仲が怪しくなり、別れてしまうと……。また、トニーは一度だけ招待されたベロニカの実家で出会った美しい母親セーラから「ベロニカに振り回されないで」と忠告されたが、それって一体、どんな意味だったの……？

男にとって高校、大学時代の初恋の思い出は単に甘酸っぱいだけではなく、時にミステリアスな要素をはらむ事があるが、本作では、ベロニカの最大の魅力がミステリアス性だけだけに、トニーとベロニカとの出会いから別れに至る経過も40年後の今、思い返してみてもミステリアスなことだらけ。ひょっとして、ベロニカがトニーの親友だったエイドリアンの日記をトニーに引き渡すのを拒否しているのは、そこら辺りに理由があるのかも……？

## ■□■恋人との別れ、妊娠、親友との結婚。それをどう総括？■□■

母親のセーラがなぜベロニカのことを「ベロニカに振り回されないで」と、トニーに忠告していたのかは永遠の謎だが、本作前半に見るトニーとベロニカとの交際状況を見て限り、とにかくベロニカのミステリアス性が顕著。一般的に、男女の恋愛の初期においては、女の方が優越性を保つことが多いから、セックスをはじめとして女から「これもダメ」「あれもダメ」と言われると、その女のミステリアス性がますます増していくものだ。実は、私もそんな経験を……。他方、青春の真っ只中にある男は女性に対して一途だから、好きになったら一方的に突き進むだけになる。そのことは、『ロミオとジュリエット』におけるロミオを見ても明らかだ。ところが、トニーの懸命の努力にもかかわらず、ベロニカとの仲が次第に怪しくなつたうえ、ベロニカの妊娠、ベロニカとエイドリアンとの結婚、そんな噂を聞くと……。？

そんな中、トニーは心にもなく親友のエイドリアン宛てに、2人の結婚を祝福する手紙を書き（タイプを打って）、投函するシーケンスが登場するが、さてこれはホントにホント……。？映画は何とも便利な芸術だから、必ずしも本当のことをスクリーン上に映し出さなくても、観客に怒られることはない。たとえば、上記のシーンも、あれは彼の心のほんの一面を切り取った映像にすぎない、と説明すれば、現実にはそんな事実はなく、逆に本当に書いて（タイプを打って）出した手紙はひどくおぞましい内容のものだったという弁明だって通用するわけだ。本作には、パトラ監督によるそんなテクニックが至るところで使われているので、要注意！私を含めて多くの観客は、多分パトラ監督の思いどおりの

テクニックに翻弄されることだろう。

ベロニカの行動もミステリアスなら、それに対するトニーの行動もミステリアス。もっとも、ベロニカの妊娠やエイドリアンとの結婚、さらにエイドリアンの自殺は事実のようだから、あの時から40年を経た今トニーは一人の時間を過ごしていたが、あんな手紙が来ると、何としてもエイドリアンの日記を遺品として受け取りたいと願うように。しかし、トニーは「俺には遺品を受け取る権利がある」と主張し、別れた妻で弁護士のマーガレットから反対されたにもかかわらず、旧友のコリンやアレックスなどと連絡を取って、ベロニカとの再会を果たすことに・・・。

## ■□■この男は一体ダレ？ 驚愕の事実には啞然！ ■□■

本作のチラシには、青春時代から40年後のトニーを演ずるジム・ブロードベントと同じく、40年後のベロニカを演じるシャーロット・ラプリングの「二枚看板」が写っており、ジム・ブロードベントは冒頭からラストまで、時々笑いを呼ぶシーンを含めて静かな熱演を見せ続けてくれる。それに対して、40年後のベロニカは後半に至って少しか登場し、トニーとの「ご対面」を果たすが、そこでもミステリアス性は昔のまま。この女は今どこでどんな生活をしているの？そしてまた、母親セーラの遺言執行人としての義務をまっとうに履行しようとしなないことをいかにトニーに弁明するの？そこらあたりのトニーの質問にもベロニカはまともに答えないまま、ある書類を渡したが、そこには一体何が書かれていたの？

ベロニカのそんな対応の結果、本作ラストはトニーのベロニカへのストーカーまがいの行動になっていくので、それに注目！さらに注目すべきは、そこでベロニカが親しげに手を繋いで歩いてきた若い男の存在だ。アレレ、ここに至って新たに登場してくるこの若い男は一体ダレ・・・？そんなまったくワケがわからなくなる展開をバトラ監督は実に巧妙に見せていくため、私たち観客はグイグイそのミステリアス性に引き込まれていくことになる。そこで明らかにされるのは、この若い男はベロニカの子供ではなく、何とベロニカの弟だとのこと。ええっ、それって一体ナニ？ ホントに、この若い男はエイドリアンとベロニカの母親である故セーラとの間に生まれた子なの・・・？すると、トニーが、ずっと心に秘めていた「ベロニカとの記憶」って一体何だったの？そこで、あらためて本作の原作のタイトルである「終わりの感覚」を考えてみると・・・

2018（平成30）年2月23日記